

Predictive Factors for Rebleeding after Negative Capsule Endoscopy among Patients with Overt Obscure Gastrointestinal Bleeding

原田, 英

<https://hdl.handle.net/2324/4475000>

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (医学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

(別紙様式2)

氏名	原田 英
論文名	Predictive Factors for Rebleeding after Negative Capsule Endoscopy among Patients with Overt Obscure Gastrointestinal Bleeding
論文調査委員	主査 九州大学 教授 石神 康生 副査 九州大学 教授 小川 佳宏 副査 九州大学 教授 中村 雅史

論文審査の結果の要旨

カプセル内視鏡検査は、原因不明消化管出血（OGIB）の評価に有用であるが、顕性のOGIB患者の原因病変を常に特定するとは限らない。そこで、顕性のOGIB患者でカプセル内視鏡施行後も出血源が不明であった症例の再出血を予測する因子の特定を研究の目的とした。顕性のOGIBのためにカプセル内視鏡検査を受けた221人の患者の臨床データを遡及的に分析した。カプセル内視鏡検査後も出血源が不明であった120人の患者のうち、112人の患者の臨床経過を追跡し、再出血に関連する臨床的要因および再出血の原因となる病変を調査した。CE所見陰性後のフォローアップ中に37人の患者（33.0%）で再出血が確認され、カプセル内視鏡検査後24か月以内に36人の患者（32.1%）が再出血を発症した。多変量解析では、顕性の消化管出血から24時間以内にカプセル内視鏡検査が必要と臨床医が判断した症例および初回のカプセル内視鏡検査時に重度の貧血を認めた症例が、再出血に関連する独立した因子として抽出された。再出血源は13人の患者で同定された。カプセル内視鏡検査後も出血源が不明であった顕性のOGIB患者において、再出血は稀ではない。出血から24時間以内にカプセル内視鏡検査の施行が必要と臨床医が判断した患者、または重度の貧血のある患者は、カプセル内視鏡検査所見陰性後の再出血のリスクが高いと考えられる。

以上の結果はこの方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験では、論文の研究目的、方法、結果などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容およびこれに関連した事項について質問を行ったがおおむね満足すべき回答を得た。なお、本論文は共著者が10名を超えるが申請者が主導的に研究を遂行したことを確認した。

よって調査委員会合議の結果、試験は合格と判定した。